

第3期札幌文化芸術円卓会議 第5回会議

会 議 録

日 時：平成26年9月12日（金）午後6時開会
場 所：札幌市役所本庁舎 地下1階 3号会議室

1. 開 会

○事務局（加茂市民文化課長） 富田委員は、多分、間もなくお越しになると思います。鈴木委員からは、若干おくれる旨の連絡をいただいております。

皆様、本日も大変お忙しい中をお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。

第3期札幌文化芸術円卓会議の第5回目を開催したいと思います。

本日は、前回の議論の続きということで、皆さんにペーパーをそれぞれ作成していただきました。コンシェルジュを中心に資料をいただいておりますので、そちらの議論を中心に進めていただきたいと思います。

それでは、委員長、副委員長、どうぞよろしくお願いいたします。

2. 議 事

○北村委員長 皆さん、お久しぶりです。

あっという間に夏が終わってしまって、私の夏を返してほしいと思うような日々です。

前回は、アートコンシェルジュと面白さ第一主義みたいなことを中心に皆さんにレポートを書いてもらいました。私の中でぴんときていない部分はまだいっぱいあるのですが、私たちの会議も今回が5回目ですので、そろそろ佳境に入っています。今回あたりで議論の方向性みたいなものを出して、6回目、7回目までにはまとめて、8回目は市長へ提出いたしますので、実質的には今回も含めて3回の議論となります。その中でまとめをしなければいけませんので、今日は、ある意味では議論の方向性を決める大事な会議になるかと思っています。

皆さんからご意見をいただき、事務局で1枚物にまとめてくださったもの、それ以外に皆さんがご提出くださったものの全文があります。これを一々説明していると時間もたらないのですが、読んだだけではわからないところもありますので、ポイントを押さえてご説明いただき、なるべく多くの時間を皆さんの議論に当てたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

○南副委員長 今、委員長から論点3を含めてかなり長く書いてくださっていますけれども、非常に重要なことが書かれているように私には思えるのです。ですから、委員長から先にお話をいただいてから進めたほうが時間の節約になるのではないかと思います。

まず、委員長からお話をいただきたいと思います。

○北村委員長 それでは、私から説明させていただきます。

前回、アートコンシェルジュについて出ましたが、僕にはまだぴんとこないところがあると申しあげましたが、このレポートを書いた後にも色々考えて、皆さんのご意見を伺ってつらつら考えてみました。

私からは、前のときにポータルサイトという言い方をしています。要するに、フェイス・ツー・フェイスのポータル、今で言うと保険の窓口みたいなもので、そこに行くとどんな

保険でも全部をあつらえてくれるようなもので、あるいは、1カ所に見積もりを出すと数社から引越しの見積もりが来るとか、車の査定を全部してもらえるとか、そういうサイトがあります。言ってみれば、情報が1カ所に集中してきて、それを運送会社なら運送会社に情報伝達して各運送会社から回答をもらって、また伝えるなどですね。

そこに入ってくるのは、南副委員長がお書きになった図では企業や市民やアートディレクターなど、色々な人が入ってくるし、色々な人が出てきてもいいのです。だから、南副委員長のレポートで非常に重要なのは、縦割りだけではなく、横断的にということをお書きになっていましたけれども、要するに、色々な人がそこに入入りし、単純にネット上にあるものではない具体的な窓口になる受付係なのかなというイメージを持ちました。

保険の窓口、何とかポータルサイトなど、そういう窓口をつくる、あるいは、組織をつくることはそんなに難しくはないと思うのです。ただ、前回、アートコンシェルジュの話がなぜ出てきたかということ、ちょうど札幌国際芸術祭が始まる直前のことで、どうして必要な人に必要な情報が届かないのだろうか、コンテンツや情報はいっぱいあり余っているはずなのに、それが必要な人に届かないのは一体なぜなのかということがあり、アートコンシェルジュという考え方が出てきたように思います。ただ、アートコンシェルジュを設置したからといって、その問題は解決できるかということ、なかなか難しいのではないかと思うのです。アートコンシェルジュをつくれれば問題は解決するのではなくて、何が足りないのかを考えると、要するに営業なのではないかと思うのです。

こういう例が適当なのかどうかわかりませんが、例えば、劇団四季でミュージカルをやっています。あれだけテレビのコマーシャルを打って、ポスターを張って、チラシを配りまくって、大勢の人を毎日集めています。あるいは、日本ハムでもいいです。ポスターを張って大勢の観客を集めています、そういう日本ハムや劇団四季などでも人が大学に営業に来ます。夏休み前だと、夏休みにはこういうお得なチケットがあります、学生割引でチケットがあります。日本ハムからも、北大の皆さんに特別割引チケットがあります、2,500円のところが1,000円ですと言うわけです。そういう努力をして人を集めて、情報をまいているのです。それでも、日本ハムの試合の観客が減っているという状況だろうと思うのです。

アートの場合はもっと厳しくて、アートコンシェルジュを設置しましたと言っても、誰もと言ってはおかしいですが、そういう窓口をノックしてくれる人はそんなに多くないだろうと思います。あることは知っていて、清水委員は、あれば積極的に利用したいとおっしゃるのですけれども、190万人みんなが押しかけて相談に来るかということ、多分そうはなりません。

それは何が足りないかということ営業で、こういうものがあります、こういうふうに利用してくださいということ具体的にフェース・ツー・フェースでやらないと、仕組みをつくってもなかなか難しいかなと考えています。

だから、そういう相談窓口があって、そこに行けば何かの知恵を授けてもらえたり情報

を受け取れたりする仕組みをつくることも大事ですが、もう一歩進んで議論しないと、つくりました、ぜひ活用してくださいと言っても、閑古鳥が鳴くような状況になりやしないかなということに危惧しました。

もう一つは、アートコンシェルジュは必要な人に必要な情報を届ける仕組みをつくりたいというところから出てきたのですが、面白さ第一主義というのは、そこにかかっている看板みたいなもので、ここをたたくと何かおもしろいことがあるぞという人寄せの道具みたいなものだろうと思います。

それは、大事なことではありますね。営業というか宣伝というか、何かの驚きや発見があって、笑うこと、悲しいことがあって、心が動かされるようなわくわく感が札幌アートなのだということで営業すれば、それは一つの方法にはなるかと思います。ですから、そこをもう一歩詰めて議論することが必要かと思います。

そういうことから、1、2、4については色々考えたのですが、その先にもう一歩というのはどうすればいいのか、営業する、営業するための仕組みはどのようなかということでした。

私のレポートでは、論点3のところを書きましたように、円卓会議があと二、三回で何かしらの報告書をまとめなければいけないという役割を負っていますから、私たちが考える札幌市の芸術文化の方向性をどちらに見定めたらいいのか、もう一回、原点に戻って考えてみるためにこれまでの議論を振り返ってみました。

結論として言えば、これはこういう言葉がいいかわかりませんが、創造都市さっぽろの実質化です。こう言うと担当されている方に怒られてしまうかもしれませんが、創造都市さっぽろを私たちの生活の中により身近にするということです。創造都市というのは、芸術、アートと同じくらいクリエイティビティーという言葉の肌合いがよろしくないのだろうと思います。

私は創造性に乏しい人間だから、アートのことなんか私たちは全然関係ないわと学生たちも言います。しかし、アートにしてもクリエイティビティーにしても、私たちの暮らしと決して無関係ではないのだということをもう少し浸透させたいということが一番最初の議論の出発点だったのではないかと思ったのです。

ですから、そういう理念的なものをもう一度考えた上で、そのための方策としてコンシェルジュをどうするか、アートセンターをどう運営するかといったことを考えてみたらどうでしょうかということがこのレポートの趣旨です。

皆さんのレポートを見てなるほどなと思ったのは、先ほど言ったように、南副委員長の横のつながりというか、ネットワークのことで、それも大事だと思います。

富田委員は、実際に国際芸術祭のボランティアなどにかかわって仕事をされているかと思っています。そのカフェに集う人などはもちろん熱心に、自発的に活動されていると思うのですが、どこまで関与していくかです。自発性を持つと、とても大事な強いエネルギーを持った人ですから核になります。しかし、そういう人以外の人をそこに巻き込む

にはどうすればいいのかということも必要です。逆に言うと、そういう人は放っていてもいいのです。放っていても何でも自分でやってしまいます。むしろ、そうではない人を引き込むような仕組みがコンシェルジュやアートセンターなんかでできるかなと思いました。清水委員の言うアートコンシェルジュとは、札幌版のコンシェルジュにすべきだということですね。

皆様のご意見をお聞かせいただきたいと思うのですけれども、私の意見としては、もう一度原点に戻った上で、コンシェルジュなり面白さ第一主義なりセンターなりをどういうふうに体系化していくのか、一つの議論の中に組み込んでいくのかを考えてみたらどうでしょうかということなのです。

南副委員長、こんなことでよろしいでしょうか。

○南副委員長 今、北村委員長に先にお話しいただきましたが、その中で理念という言葉が出てきているわけですけれども、理念は軸になるものですから、それを確実に押さえ、そのことを頭に入れながらそれぞれ発表していただくことが一番手っ取り早いのではないかと思います。これからの展開として、ある程度まとめなければならないという重い課題がありますので、そのようにやったらいいと思います。

ありがとうございます。

○石川委員 文章を書いて、結構前に提出したので、何を書いたかを忘れているところもあります。そこで、二、三日前に慌てて自分の意見を読み返して、結局、自分は何をコンシェルジュに求めているのかということを中心に簡単に説明したいと思います。

細かい部分はここに書いてあるとおりです。

今、委員長がおっしゃったとおり、コンシェルジュという仕組みをつくること自体はそんなに難しくないだろうと私も思います。今回、芸術祭では「みんなで作ろう」というフレーズがありましたけれども、コンシェルジュの最大の役割は、市民やボランティアの接点です。創造都市として、また、芸術都市としてこれから盛り上げていくためには、今のお話にもあったように、特にアートにそれほど関心のない人をどれだけ巻き込めるかが一番重要になってくると私は思っているのです。

私が考えているのはそのためのコンシェルジュで、市民なりボランティアの人が創造都市である札幌に気軽にアクセスできるようにすることです。そういったものが通年で存在して、札幌は芸術やアートに理解があり、簡単に相談できる窓口もあるのだとわかると思うのです。そういう接点があり、利用されれば、創造都市さっぽろや芸術祭に対する関心度も高くなるわけです。

今の状態のように、芸術祭といっても自分と芸術祭をつなぐものが全くないと、関心があってもよくわからないと思うのです。ただ、コンシェルジュみたいな人がいて、何かを気軽に聞ければいいと思います。

そして、私が考えるのは、相談窓口だけではなく、同時に常に色々なアート情報をわかりやすく伝えるメディアとしての機能も持たせるということと、そのために専門的な職員

を雇うよりも、公的にもアートに詳しい人材が札幌にはいらっしやいますし、私的な機関にも詳しい方がいるものですから、そういう人をボランティアとしてどんどん巻き込んでいけばいいのではないかと思います。

今回、芸術祭でボランティアの活用がありましたけれども、アートに関するボランティアは、芸術祭に関係なく、通年で募集をして、札幌のアートにかかわるイベントには声をかけて協力してもらうようにして、市民との接点をどんどんつくってほしいのです。ですから、単に相談できて答えが得られるような場所というよりも、創造都市さっぽろ、芸術祭を行う札幌に気軽に接点を持てるようなもので、そういうものがあれば、札幌が行う芸術祭や創造都市に関するプロジェクトへも必ず関心が高まるはずだと思っています。

○北村委員長 ありがとうございます。

私は、ここに来る前に500m美術館で1時間半ぐらい作品を目にしました。間接的ですが、それもコンシェルジュですね。

○尾崎委員 僕が思うアートコンシェルジュは、基本的に皆さんと大体は共有できていると思っていますが、そこに学術機関的な部分がもうちょっとあっていいのではないかと思います。また、それを発展させて、教育と組んで、そういうものを取り入れていくかを考えられていくのが理想ではないかと思っています。

やはり、ボランティアとともに動いていく部分が一定程度は必要だとは思いますが。前回の会議で、何だか詳しいおじさんがいると冗談っぽく言いましたよね。専門家という言い方が正しいのかどうかはわからないのですが、専門的に研究している人がいるべきだなと個人的に思います。

また、イメージ図については、全部を取り持つ機能というよりは、とがった部分があってもいいのではないかと思います。だから、コンシェルジュが真ん中に置かれて、全部とコンタクトをとっていきようなものはちょっと違うのかと思って、こういった図を描きました。コンシェルジュの置かれるところとしては、アートセンターとのかかわりが切り離せないと思っております。これに関しては何回か言っているかもしれませんが、アートセンターを設置するべきではないかと思っています。

それから、今後の議論の方向性についてです。今までは宿題にちゃんと書いてこられなかったのですが、今、何が足りていないのかということに対して営業部分だというのはなるほどと思いました。アートもそうですが、子どもたちに対しては盛んに色々なものが取り入れられていると思います。ですから、そこに生活している子どもに対しては色々なイベントができていけると思うのですが、それらは教育になかなか取り入れられておらず、結局は芸術鑑賞どまりで、僕が子どもころから余り変わっていないような気がします。ただ、アウトリーチ的なことにかかわる部分は増えているとは思いますが。

文化芸術に携わる人は、みんなすごく一生懸命やっていますし、努力しているのですが、恐らく、そういったものが根づいている外国に比べると、努力している単純な時間が少ないので、それを解消するために教育に取り入れられていくべきだと思います。

今回の話からはずれてしまったのですが、営業が足りていないというところから今ふと思ったことを言わせていただきました。

○北村委員長 ありがとうございます。

尾崎委員のレポートを読んで、あるいは、これまでの発言などから一番強く感じたのは、多様性をとても大事にされようとしているというか、むしろ、マイナーな部分をちゃんと救おうとされているように思います。メディアに乗るようなものは全て多様性が失われたというお考えですが、これも大事でして、そういった多様なものを多様なものにする方策をどこかで考えなければいけないと思います。

だから、大くりでわっとみんなが参加するだけではなくて、富田委員がやっているように、少人数でもちゃんとフォローするような仕組みが大事だと思います。

○清水委員 今、脳内がすごくぐちゃぐちゃしている感じです。議論が停滞して、産みの苦しみの時期に入っているのだと思いますが、ここを乗り越えるといいものができると思って色々考えていました。ただ、委員長の冒頭のお話を聞いてもよくわからなくて、今もらったパスだと、私はゴールに向かうシュートが打てないです。これが、アートコンシェルジュが、どつぼにはまったきっかけで、一旦ここから離れなければいけないのではないかと考えています。これについてばかり考えているとメーンの方向性が出ないのではないかと考えています。アートコンシェルジュのことを否定する気は全くないのですが、これから議論を進めていくに当たって、何をしゃべったらいいかがわからないです。

理想的なアートコンシェルジュのことを考えて、それがあれば創造都市の実質化に向けてうまくいくのではないかと考えて、みんなで知恵を出し合ったけれども、そういう方向に余り持っていけないということは、創造都市の実質化に向けてはアートコンシェルジュが決定打ではないと思うのです。ですから、アートコンシェルジュについて考えて、今、停滞したことを踏まえた上で何かの別なアプローチを考えることになるのかな思っております。

アートコンシェルジュについてコメントするとすれば、創造都市の実質化のほうから話すと、こういうものは言った者勝ちだと思うので、創造都市ですと言ったところで一旦はいけると思うのです。そして、今はその2段階目で、言ってしまったけれども、実際はどうなのかということに伴わせていこうとしている状態です。

結局、創造都市に住んでいる創造市民である人たちが余りそう思っていないところに問題点があると思います。そこで、認識するためにはどうしたらいいかですが、外で認めてもらって、初めて中にいる人が創造都市に住んでいることに気づくことだと思います。中にいる限り気づけませんし、客観的に見ないからわからないので、外に出ることが必要なと思うのです。

そうなると、外に認めてもらうことから始まってしまうので、対外アピールや広報など、中の人に対することよりも世界やほかの都市に向けて札幌は創造都市だという認知度を上げることによって、ああ、札幌は創造都市なのだと思えば、うまく回っていく

のではないかと思うのです。

私の考えたアートコンシェルジュは、どちらかというところ、みんなの日常生活にアートを取り入れるための便利さよりも対外アピールのものを盛り込んでしまったかなという感じがちょっとします。言いかえるなら、アートアイコンとかアートアンバサダーとか、そんな感じのものを私はイメージしております。

○北村委員長 創造都市さっぽろでは、多様な取り組みをして、来年か今年か、シンポジウムなどを開く予定ですね。関連する都市を集めて札幌で大きな会議があるはずですが、対外的なアピールも必要ですけれども、それを札幌市民が実感しないで、いつまでたっても人ごとでよそごとのままで終わってしまうのはもったいないなとは思っています。

○鈴木委員 まず、遅れしてしまって、すみませんでした。

冒頭部分にいなかったもので、どういう話があったのかはわからないのですが、宣伝や足りないとか認知度が低いとか、そういう話を聞いています。多分、コンシェルジュに関して、大体の意見が石川委員と似通ってきたというか、同じ意見を持ってきたと思います。

宣伝の内容の質はわからないですが、宣伝を全くやっていないということではなくて、工事現場のところに大きく札幌国際芸術祭と出していたり、シティ・ジャズのCMがテレビに出ていたり、メディアを使った芸術関連の広報はある程度やっていると思っています。

先日、フェイスブックで知人に創造都市という言葉を知っていますかという投げかけを試みたのですが、やはり、音楽や美術をやっている人でさえも知らない方がいらっしゃるのだなという印象を受けるような返答がきました。もちろん、美術をやっていない方はわからないと言う人がほとんどでした。

ここに、コンシェルジュに関して素材を調理するコックと書いてありますね。無関心の方と先ほど石川委員がおっしゃっていたのですが、必ずしも音楽や美術をやっているなくても、好きな服を買ったり、日常で音楽を聞いて、この曲はいいよねと言っている時点でそれぞれしっかりとした芸術を好きになるような素材を持っているのではないかと考えています。そこで、コンシェルジュという役割を通して、その人に合った素材を料理していき、芸術をどんどん好きになってもらい、市民を成長させるような役割を持たせるようなことをしたほうがいいのではないかと考えています。

それにつけ加えて、アーティストとマネジメント関係の会社の方や札幌市の方などをつなぐパイプ役をすることによってアーティストもどんどん成長していき、イベントをつくり上げるなど、自分でセルフマネジメントができるような体系がとれていって、外に自発的に出ていけるような感じになるのではないかと考えています。

結論としては、コンシェルジュはあったほうがいいのではないかなという意見です。

○富田委員 確かに色々な意見が出されて、これを見て一つにすきっとまとめることはもちろんないかと思っています。今、面白さ第一主義ということで、本当に手放して、ある種、

フラットに考えてみようとしていますね。アート云々よりも、まず、そういうふうに考えてみようという視点ですね。

もう一つに、僕は参加型ということに大きな可能性を感じています。それは、僕が芸術祭にかかわって市民参加型のプロジェクトをコーディネートしていることもあるのですが、ここにも書いていますように、これをやっていると自分たちで発信する人たちが出てくるのです。また、北村委員長が言ったように、好きな人は放ってあげればいいのかもしいのですが、抛りどころとして、アートにちょっと興味を持って動く人が市民との橋渡しになって伝わることもあるので、そういうことが大きいかなと思います。

さらに、芸術祭は、先ほどの清水委員がおっしゃられたように、海外を視野に入れて動いているプロジェクトであり、何が国際レベルなのかということもちゃんと考えた上でやっているのです。ですから、外国から作品を呼べば国際芸術祭なのかということ実はそうでもなくて、どのような発信をするか、メッセージを持っているかがすごく大事です。

先ほど言われて思ったのですけれども、国際と言うのであれば日本の打ち出し方まで考える必要があるし、札幌がどういう魅力を持っているかという客観性も同時に考えていかなければならないのですが、そのときに観光的なアプローチが一番わかりやすいかもしれませんが。海外に発信する、道外へ発信する、札幌外へ発信する、自分が属しているコミュニティの外に発信するということからまず始めるしかないのです。

そこで、一つおもしろいなと思ったのは、尾崎委員が書いていた認定制度や資格制度です。これは、がちがちなものではなく、それが楽しいゲーミフィケーションになっていけば、結構楽しめるものだと思うのです。今、僕はボランティアの人にすごく助けられてプロジェクトを進めていますけれども、コンシェルジュたちも楽しんでいないと、次は来ません。ただ美術館にいて、ずっと座っている監視要員では楽しくありませんし、一回やれば済んでしまうのです。自発的に何かを考えたり、こうやったほうがいいのかというようなプロジェクトの余白がないと、かかわっている人たちのモチベーションが維持できないので、そこら辺をどういうふうに用意してあげるかで、それがコーディネーターやディレクターの担うべき役割だと思うのです。そうして初めて横断的なことができ始めていくのかなということをはんやりと考えていました。

だから、尾崎委員が言っているみたいに、専門性を持った、ハイアート、クオリティー度が高いと言われている芸術を見る場も必要だし、それは翻訳して伝えてあげる人も同時に必要でして、これが両輪であり、アーティストが単純にプレーヤーとなるのではないということです。

色々やっているのと、これは一体誰がつくっているのかとよく聞かれます。そこで、これは皆さんでつくったものですよと言うと、そうなのだとと言われることが多いのです。多分、アートはアーティストという特殊な能力を持った一人一人に帰属するものであって、みんなでもにつくっていくという感覚はないのです。でも、時間はかかるのですが、ともにつくっていく感覚こそ、ひいては、札幌は文化芸術がおもしろいところだ、面白さを持

っている都市だということにつながっていくのではないかと考えています。

書いてあることは読んでいただければわかると思うのですが、そんな中で、僕は今、現場で起きていることをちょこちょこ拾いながら勉強させてもらっているような感じで、一つ一つ丁寧に人をつないでいくというか、こういう人がいるのだなという把握をしています。僕と同世代のプロジェクトマネジャーと言われる人たちが全国から集まってきて、坂本龍一さん、その下にアソシエート・キュレーター2人がいますけれども、その下についているアシスタントをしているプロジェクトマネジャーは現場感覚を非常に持っていますし、能力の高い人が多いので、そういうところに入っていったの勉強はすごく大事だと今は考えています。

これは、市民に参加してもらうこととは別のフェーズですけれども、アートマネジメントできるということを考えると、正直、そういうところかなと思います。場を設けたらそれでオーケーではないということは間違いないありません。そして、そういう現場をつくらなければ人は育たないという難しいところもあると感じています。

○北村委員長 鈴木委員は、去年、500mで単に会場で監視役をしているボランティアというレベルでは全く違いましたね。もちろんボランティアとして参加している人も大変だったと思うのですが、それをまとめる事務局として、今、富田委員が言ったプロジェクトマネジャーみたいなまとめ役がいなくて成り立たないようなところですね。

今回、国際芸術祭で大勢の人が来ましたが、終わってしまうと、彼ら彼女らはほかのところに行ってしまうかもしれないですね。

○富田委員 一つだけ言うと、これは終わってほしくないというか、どういうふうになっていくかです。お客さんというか、観覧に来てくれる人から、これは初めてですか、これはなくなってしまうのかという声がたくさんあります。だから、長期的にそういうものを動かしていけばいいのかと思います。

○北村委員長 3年に1回というか、3年ごとにやるとなっておりますが、残りの2年間をどう準備するかがとても大事です。これはここの中心の話ではないかもしれませんが、次の3年目に向けてすぐ出発しないと間に合いませんので、そのときの実際の担い手がどういう人になるのかも考えなくてはなりませんね。

○富田委員 そんなことを考えざるを得ない現場にいるという感じです。

○山田委員 考えれば考えるほど悩ましいのが正直なところです。

冒頭に北村委員長からお話があったことは、皆さんのまとめのレポートを拝見してわかりました。前回の円卓会議で面白さ第一主義という言葉とアートコンシェルジュという言葉が出て、これがこれからの会議の突破口となるツイントップの言葉かなと思ったのです。しかし、その後、冒頭に委員長から創造都市さっぽろの実質化についてありました。そこで、理念と方法論としてどう考えるかというところにアートコンシェルジュと面白さ第一主義があると考えているのです。ただ、アートコンシェルジュと面白さ第一主義は並列の状態ではなくて、どちらかという、アートコンシェルジュのほうが仕組みというか、方

法の一つなのかと感じます。

私の言うアートコンシェルジュはどう思いますかという問いへの答えは本当に簡単で、わからない人に背中を押してあげる存在ということで、その先のことまで頭が広がらないで終わっているのです。ただ、目指すところ、会議の理念に創造都市があると思うのです。これは、もともと外国の言葉でして、それが日本に持ち込まれて、札幌もその一員となっているということですね。

そもそも創造都市そのものがどういうものかです。今まで、札幌市のシンポジウムなどで色々な表現が出ていますけれども、創造都市そのものはどんなものか、そして、創造都市をどうやってつくっていくかが理念というか、目指すところなのかと感じます。そのため一番の突破口、大もとが面白さ第一主義で、札幌としておもしろいものをどんどんやっていこうということですね。それから、今、皆さんのお話にもありましたけれども、参加型にして、市民の巻き込みを図っていくものを取り入れながら、面白さ第一主義に向かい、その中の一つの仕組みとしてアートコンシェルジュがあると、とてもスムーズにいくのかと感しました。

ただ、頭の中がまだもやもやした状態ですので、今まで皆さんのお話を伺っていて、目指すところについて、自分なりの整理のために申し上げます。

目指すところは創造都市さっぽろの実質化ですね。しかし、この実質化がわからないので、創造都市はどんなものかを市民みんな考えて、実現していこうということですね。そこに向かうのに面白さ第一主義という宣言があって、その方法論としてアートコンシェルジュがあり、ほかにも色々考えるべきところはあるということですね。

取りとめがないのですけれども、こんなものが頭の中にあります。

○伊委員　まずは、前回会議に欠席してしまい、申しわけございませんでした。

私も頭の中がごちゃごちゃしているのですけれども、最初に北村委員長がおっしゃった保険の窓口についてです。私も地下を歩いてきて、保険の窓口を見て、同じことを思っていたので、委員長も地下からいらっしゃったのかなと思っていました。

面白さ第一主義はすごく大事なことだと思うのですけれども、委員長がおっしゃったように、やはり、営業というか、おもしろいことを仕掛けていく集団が必要ではないかと思っています。コンシェルジュというのは、すごく大事で、皆さんがおっしゃったこと全てがそうだなとうなずけるのですが、どうしても受け身な形として捉えてしまうのです。

先ほど鈴木委員がおっしゃいましたが、札幌で色々なことをされていることの宣伝が足りないのではないかとということがありましたが、足りなくはなくやっているなとも思います。劇団四季も全部そうですけれども、文化芸術は地道に、欲を欠かず、積み上げていって少しずつ広げていくしかないので、すごくジレンマを感じて焦るとは思います。しかし、今回、こうやって円卓会議で話をして、最終的にどこかに着地して次に渡していかなければいけないとなったときに、文化芸術が大事だとうことは皆さんの認識の中にあると思うので、そういったことよりも、具体的にどうするべきかに着陸点を決めて、その後

を具体化していってもらえればいいのではないかと思います。

今話し合っていることが余りにも専門的過ぎる感じがするので、もっと市民に近づいてやっていこうと思うと、まずはという大きな柱を1本、2本つくるべきかと思います。先ほどもおっしゃっていたように、巻き込んでいかなければいけないという部分では、面白さ第一主義はすごくいい言葉ですが、仕掛ける集団が絶対に必要だと思います。それには、芸術祭みたいな大きなものもから、本当に小さな時計台でやっている演奏会などもあって、広報さっぽろを見ると色々なものが載っています。

先ほど資格の話が出ていたのですけれども、札幌は意外と独自の資格があるようで、ちょっと前も観光通訳の独自の資格について見ました。ただ、これは受けるのに2万円ぐらいかかるので高いなと思いましたが、色々なことを自分で結構されているのです。それについてアンテナを立てている人たちは気づいていくし、市でもできる限りのところでうたっています。しかし、こんなことを言ったら本当に失礼ですけれども、市や区がやることには、どうしてもお決まり感があるというか、ちょっと固い感じがあるのです。芸術はふざけてもいいと思うのです。ですから、そういったおもしろいことを仕掛けていく集団を行政主導の組織として一つつくとやりやすいと思います。

なぜかという、アートや文化芸術は、何をやるにしてもどうしてもお金がかかるのです。そうすると、やりたくてもなかなかうまくいかなかったり、ボランティアを募るしかなかったり、クオリティーを下げたり、難しいところが出てくるので、そういったときにアートコンシェルジュやコーディネーターみたいな方が企業とつなげいくことが必要だと思います。

それとは別に仕掛けていく、おもしろいことを企画してやっていく役割ですね。具体的には出ないのですけれども、清掃車にアートを施すとか、そういった具体的な何かを仕掛けていく組織というか、担当などがいて、一人でも多くの市民を巻き込んでいくことが大事ではないかと思います。市民を巻き込むには、先ほど富田委員が言っていたらっしゃったように、自分がそこで何かをしたということがすごく大事になってくると思います。ですから、焦る気持ちもありますけれども、一人でも多くを取り込んでいくことに面白さを仕掛けていったらいいのではないかと考えています。

また、創造都市さっぽろについてです。

これはキャッチフレーズでもつくって浸透させていけばいいと思います。例えば、面白さを仕掛けていく集団だったら、創造都市さっぽろ軍団などですね。ちょっとださくて申しわけないですけれども、このようなキーワードを浸透させるのです。例えば服屋のレジの横に「創造都市さっぽろ」とあれば、ぱっと目にできると思います。ですから、色々なところでコラボはしていけると思うのです。一つのキーワードやキャッチフレーズみたいなものがあって、そこに仕掛けていく集団もあれば、仕掛けてほしい人たちが話を持っていくコンシェルジュの2本柱でやっていけばいいかなという気がします。

また、私は絵を見てもわからないところがあります。でも、その絵をすごく好きな人も

いますね。また、吹奏楽を聞いて寝てしまう人もいれば、大好きな人もいますので、分野がすごく広くて、まとめるのはなかなか難しいとは思いますが。でも、先ほども言ったように、仕掛ける集団がいて、色々な分野で細かく仕掛けていくと、ちりも積もれば山となるではないですけども、一つ一つがつながっていき、キャッチフレーズのもと、創造都市というか、おもしろいまち、気持ち豊かなまちに自然となると思うのです。

ですから、創造都市さっぽろにしようというのは、人の気持ちを豊かにしようという部分があると思いますので、そういったところにつなげていくために具体的にどうするかを決めていったらどうかと思います。

○北村委員長 富田委員の話もそうですけれども、皆さんの話を聞いていると、参加型とか、市民を巻き込むとか、そういう仕組みや仕掛けをする集団をつくるということですね。それを市が運営するのか、どこか別のところに委ねるのがいいのか、それはまだわかりませんが、そういう参加型みたいなものを少人数でも続けてやっていくのがいいと思います。

南副委員長、お願いします。

○南副委員長 まず、コンシェルジュについてですが、ネットワークで考えていました。

誰かそういう人物がいるというよりも、色々な組織あるいは個人等をつなぐためのものですね。なぜそういうことを考えたかという、石川委員がおっしゃいましたが、例えば行政が縦割りになっていて、清掃局にお願いしても、ぽんとはなかなか行かないわけです。しかし、それぞれの部局にコンシェルジュ役の人がいることによって、そこからつなぐと何とかしてくれるというような横の網をつくっていくことが大事ではないかと思うのです。

アートセンターができたときに、市役所を含めて、札幌市全体のアートのことはアートセンターに任せておいて、ほかはほかでやらせてもらいますと完全に分離してしまうのは怖いわけです。さらに、現在まだあるほかの類似した組織などが並列して似たようなことをやっていたらまとまりが悪くなってしまいます。既存のKitaraや芸術の森、市民ホールがありますが、そういったものがどのようにうまく連携していくか、そのためのネットワークをつくる必要があります、それが大事だと思います。

もう一つは、ネットワークより上のレベルもあるのですけれども、例えば小さいグループで色々やっている人たちをどうやってうまく引き出していくか、あるいは、おもしろくしていくかですね。小さいグループだけで終わってしまうのはもったいない場合もあるわけです。それらの顔と顔をつないでいくのが一番大事なのであって、そういった小さいグループ同士をまめにつなぐためにもネットワークが必要ではないかと考えておりました。ただ、それが創造都市という言葉とすぐにつながるかという、そうではないのではないかと考えていました。

また、面白さ第一主義という言葉に関しては、見るあほうに踊るあほうではないですけども、踊ったほうがおもしろいのです。いかにしてやってもらうか、それをつくっていくことが結局は面白さ第一主義なのかと思います。そこで、踊るためにはどうしたらいい

かですが、見えない状態で大体の人数にさあ踊れと言ってもやっぱり踊らないわけで、ほとんどは個人的に近い状態のものなのかと思っております。

創造都市とは、市民としてアートや創造というようなことに対して、札幌は創造都市と言っているのだよということに対してプライドを持てる状態です。では、どういうときにプライドを持てるかということ、札幌市の外に出ていったときに、札幌にはこういうものがあるのだ、例えば今回のような国際芸術祭があるのだ、いつもこういうことをやっているのだ、あるいは、ここにはこういうものがある、これが売りなのだというようなことですね。さらに、おらが村ではないけれども、自分たちの特殊性が見えることが実質化の上では必要ではないかと思えます。

今言ったようなものを持つことがまずは大事だろうと思えます。プライドを持てれば、それに対して意識が出てくるわけです。それを大事にしよう、それをもっと強くしようといった意識です。つまり、売り物をつくろうぜというものです。それをアートセンターが持てるかどうかで、それがこれからの問題なのかと思えます。

もう一つに、創造都市といった場合、必ずしも文化だけではなくて、ある程度自由に考えることができることにもつながっているわけですから、産業的なことにおいても同様で、もっと自由で、新しい創造的な産業をつくることのできる工夫がここに来ればあるのだぞというものを見せられるだけでも大事ではないかと思いました。

○北村委員長 ありがとうございます。

7時をちょっと過ぎました。

皆さんの意見をまとめていくのはなかなか難しいのですが、例えば、今、ネットワークということで、芸森やK i t a r aなど、既存の施設が孤立しないでまとめるということでした。

山田委員がいらっしゃるところはそういう財団で、全部を指定管理されているわけですが、財団の中でK i t a r aと教文と芸森が連携するような活発な動きや、このことはあそこに連絡すればいいみたいな仕組みはつくれるのですか。

○山田委員 まず、芸術の森は、全体的なパフォーマンスからイベント系を含めての美術があるし、ジャズの音楽もあるし、色々な総合施設という位置づけです。それから、K i t a r aは音楽という位置づけですし、教育文化会館の場合は舞台芸術とこれまた幅広い位置づけです。そのほかに、市民ギャラリーは皆さんの発表の場ですし、彫刻美術館は、本郷新の彫刻を含め、その他現代美術の発表の場となっている中で、連携もやっちはいるのです。

以前、市民ギャラリーで札幌美術展をやっていましたが、今では芸術の森美術館で数年前からやっております。それから、音楽で言うと、夏の風物詩の一つになっているシティ・ジャズは、芸術の森でもやるけれども、まちの真ん中の大通公園の西2丁目にライブするテントを持ってやっちはいまして、場所を離れて、芸術の森だけではなく、ほかの場所でもやっています。

それから、教育文化会館でお能をやっているのですけれども、建物の中から野外でということ、ここ二、三年はやっていませんけれども、野外でいわゆる薪能をやるなどの連携は今までにもやっているのです。

では、今後、市民の皆さんにわかるようにするかということですが、指定管理制度もあるわけですから、その中でできることとできないことを所属している私として感じております。

そこで、指定管理を一切抜きにして、先ほど尹委員がおっしゃっていましたが、具体的な何かを仕掛けていく担当の部署となる一つとして芸術文化財団があるのだろうと思います。ただ、財団としては、今、5施設を申し上げましたけれども、組織としてはある意味大きくなってしまったのです。他都市に比べたら小さいのですけれども、札幌の中では結構大きな組織になっているので、皆さんも色々な場面で触れていることがあるかと思うのですけれども、腰がちょっと重いかもしれないと感じます。

でも、そのあたりを工夫していくと、色々な選択肢の中の一つ、仕掛けていく担当の組織の一つとしては活用できるのではないかと思います。

○北村委員長 南副委員長、実際にネットワークをつくって稼働させるには、モーターのようなもの、ダイナモのようなものがどうしても必要だと思います。ネットワークがありますが、それを誰が動かすのかを考えたときにどういう方策がありますか。

○南副委員長 コンシェルジュというグループ自体がモーターになっていると一番いいのです。極端に言うと、市行政ですけれども、行政の中にそれぞれの横の連携をつくる組織をつくってしまうのです。それもアートセンターから離したいのです。その中にアートセンターも含め、あるいは、行政、民間団体を含めて統括できるようなモーターが必要だろうと思っています。ただ、これはあくまでも理想であって、そうするためには、そこに大きな力が必要になってくることは確かです。

しかし、それはもう少し多層的なものだと考えていまして、一番最初に言ったフェイス・ツー・フェイスという問題は、同じものだけれども、違うのです。あるいは、下のほうから上のほうへ持ってくるころはフラットではないと、結局は縦の形になってしまうので、そのためのクモの巣の網の張り方が必要になってくると思っています。

○北村委員長 何かご意見はありますか。

先ほど言ったように、参加型にする、市民を巻き込んでプロジェクトを行っていくことも一つのキーワードになると思います。

○富田委員 今、参加型とうたって、横につなぐということを物すごくおっしゃっているのですが、やはりつなぎ方だと思うのです。

すごく生々しい話ですけれども、芸術祭の広報がうまくいっていないという話がありますね。最初は、オフィシャルを保つために情報をすごく精査してやっていたのですけれども、そんなことをしていると間に合わないし、そこで起きていることを拾うことができないということに結構気づいてきたのです。最初は、市民にかなり近い状態の人たちで編集

局をつくりたいという申請を上げていたのですけれども、全く通らなかったです。

これが何を示しているかということ、多分、ある種、ガバナンスをする行政側がどれぐらい情報をコントロールしてプロジェクトをやらなければいけないかということです。もちろん初めてなので、かなりおっかなびっくりなところは仕方がないのですが、ある種の余白というか、キャンセルさせないとおもしろいことは絶対に捨えないし、起こらないと思うのです。そういう意味で最後に書かせていただいたのは、アートセンターのようなシステムをつくるのは全く間違っていないのですけれども、システムをつくる人が完全にコントロールするようなシステムは絶対機能しないということです。

それをあえて見せる場として市民参加というのはすごくおもしろい可能性を秘めているのです。僕も私もこれを担えるのだというか、言われたことをするわけではなく、自分が考えたことが形になってそこに見えるというある種のデモンストレーションがそこで行われるということにおいては、市民参加型が一つのキーワードというか、突破口になる可能性があるなと思いました。

僕がやっているのは子ども向けのプロジェクトですけれども、実は視野に置いているのは親御さんに対してのアプローチです。子どもに対してやっているようでいて、多様性という話が先ほどありましたけれども、あり方は色々あり得るのだよということをその場で見せるのです。これは一つの作品とっていいのか、場とっていいのか、そういうものをシミュレーションしているとも言えるのですが、そういうことをやれる場、もしくは、そういう人たちが話せる場など、場を用意していくことは何か生まれるきっかけになると思います。

アカデミックになるかどうかはわかりませんが、先ほどおっしゃったように、学びということは非常に大事だし、大人も学びたいと思っているので、そういう学びの場に同時になる、遊びながら学べる、楽しみながら学べるのは、これから非常に重要なことになっていくのではないかと思います。

アートの話ばかりして申しわけないのですけれども、わかる、わからないという指標で語る人が非常に多いです。アートはわからないからおもしろくない、わかるからおもしろいと言うのです。でも、そこにはもうちょっと色々な楽しみ方があっていいはずで、それが多様性につながっているのです。

こういう楽しみ方を私は見つけたことに実は価値があるのかもしれないのに、それは恥ずかしがって表には出てこないのです。ですから、見方のマニュアルや楽しみ方を検索することから始めてしまうのは非常に皮肉なことで、鑑賞の態度というかアートについては、自分たちがいつの間にかその中にいるというふうなことであるとか、見方をキャンセルできる方法を色々探すということはあるかなと思っています。

○北村委員長 山田委員の話だと、組織が大きくて腰が重たいということですが、行政主導になると責任の問題などでどうしても動きが鈍くなるかもしれないですね。そこで、どういう組織体にするのか、どういう権限を持たせるのかですね。

○南副委員長 やはり、行政などのような組織になると責任を受け持ちますので、責任を持ってやれるかと言ったときにちょっと待てというのが腰の重くなる原因です。ところが、アートや創造的なものをやるときに、責任を一々っていると創造的なものがどんどんできなくなってくるわけです。

例えば、行政においては、極端に言うと、市長に責任を持ってもらって、あとはやらせてくださいということが一番いいわけです。そういうような逃げ道が創造と名乗るときに必要なになってくるのです。ですから、市長に責任を取ってくださいと言ったほうが早いのではないかと思います。

○北村委員長 それが市の中の機関なのかどうかです。アートセンターについて前に考えたのは、それなりの権限、実力を持った人がセンター長にならないことには多分機能しないという話でした。だから、それは市役所の中の組織の一つがいいのか、出たほうがいいのかというのは考えどころかもしれません。

○伊委員 先ほどからお金の話をして申しわけないのですが、例えば地下鉄にポスターを張って宣伝しようと思っても広告料がかかるのです。

話が飛んで、余談になってしまって申しわけないのですが、あした、娘の学校で54名のオーケストラの演奏のチャリティー公演があるのです。チャリティーでお金を集めてはいるのですけれども、宣伝するための広告代にはお金をかけられないのです。そこで、区役所や区民センターにポスターを張らせてくださいと言っても、どうしても市の協賛が入らないと張れませんと言われるのです。それは、広報もそうです。

おっしゃったように、芸術は、ある程度自由にさせてもらわないと、前になかなか進まないし、おもしろくなくなっていくのです。行政が絡んで、責任が生じた人たちがちょっと待ってとなるとなかなか進まない部分があります。ですから、先ほどは余白とおっしゃっていましたが、南副委員長からは市長が責任を持ってとありましたけれども、ある程度自由にやらせて、最終的に変な方向に行かないのであれば、別物として自由にやらせてくれる機関があるといいのではないかと思います。でも、市でやっていると、変な言い方ですけども、箔がつくというか、呼び込みやすいということもあるのです。例えば、広報に載せてもらったり、区民センターや札幌教育文化会館に張ってもらったり、宣伝をタダでやらせてもらうと言ったらおかしいのですけれども、目に触れやすい、興味のある人たちがちゃんと見てくれるところに宣伝できるので、行政が絡んでくれることがとても大切だと思うのです。しかし、絡み過ぎて自由にできないというのもうまいかないので、そこをうまく切り離して、別物の組織が一つあることが理想です。今、自分がこういうことをやって、シレンマがすごくたくさんあったので、そう思いました。

例えば、行政が企画だけを募集して、その中でこれはおもしろそうだなというものは、企画を持ち込んだ人たちに自由にやらせて、広報に載せたり、先ほども言ったように、こういうところで宣伝するのは市で担っていただく形が理想ではないかと私個人的には思いました。

○南副委員長 話がちょっと違ってきてしまいましたね。

今、尹委員がおっしゃったことは、今まで話したコンシェルジュと言っているグループみたいなものが、そういう責任的なものがほかにある状態である程度許容してつないでくれるといいということですね。

○尹委員 例えば、私が何かを企画して、これをどこに持ち込めばいいのだろうかとなったときに、コンシェルジュと言えばコンシェルジュです。ただ、受け身的な部分だけでやっていくと、それもそれで足りないもあるので……。

うまく言えないです。済みません。

○南副委員長 創造都市と言ったときに、北村委員長が言っていましたが、日常の中に芸術が入ってくる、浸透させていくことをもっと感じさせる空間をつくっていくためにはどうしたらいいのかということが一つの理念としてあるのです。そういったものはどういうふうにするとその理念に対応する方法になるのかなということを一生涯懸命考えている最中なのです。

私も話がまだまとまっていないので、ごめんなさい。

○尾崎委員 責任云々の話に戻ってしまうのですが、芸術が生み出される過程において、責任なんかを取る必要がないのではないかというのが個人的な思いです。だから、ここの場所は責任を取らないぞという潔さみたいなものですね。これは行政のやることだから難しいですし、それを許容するポイントみたいなものを見つけなければいけないのでしょうけれども、そういったことを考えられると一つ先に行けるのではないかと思います。

○北村委員長 僕は、組織論のことはよくわかりませんが、可能性としては、札幌市が直営でやるか、あるいは、財団のようなところに委託するか、NPOか何かをつくるかですね。札幌市で独立行政法人みたいなものをお考えになっていることはありますか。

僕は、何年も前に公務員ではなくなり、身分的には違う形になりましたが、お金の出どころはそんなに変わっていないと思うのです。札幌市で独立行政法人的なアートセンターみたいなところをつくって、そこにコンシェルジュを配置する可能性はないのですか。

○事務局(加茂市民文化課長) 検討の選択肢にはあるでしょうけれども、今の段階では、独法のハードルは高いのが実態だと思います。

○北村委員長 基本的に僕らは責任をとらないので、責任の問題を考えるという面倒くさいことはやめにすればいいと思うのです。ただ、基本的な理念としては、富田委員のお言葉にありましたが、余白みたいなもの、あるいは、ある程度の自由な裁量に任せられている部分があれば、とてもではないけれども、やっていけないですし、市民を巻き込むこともできないのです。けがや事故のリスクを承知の上で、そういったことを恐れているとなかなか前に進まないのは事実です。

他にどうでしょうか。

○富田委員 今、札幌のアートのシーンを見てはっきり見えてきたことは、芸術祭がぼん

と入ってきたことによって、色々なアートのコミュニティーがすごく分散してあるということです。彼らの持っている意識というか、自分たちが果たす役割をもう少し自覚的にならないと理解してもらえないのです。例えば、学芸員など、見識のある人もいるし、わかっているのですけれども、自分が属している組織から出てどうこうできないのです。

ですから、コンペティションがいいかどうかはわかりませんが、そういう部分を担ったり、いい競争が必要だと思うのです。

頑張るだけではアートはよくなるかもしれないけれども、例えば、自分たちが持っているコンサートであれば、どれぐらいの社会性を持っていて、どれぐらい価値があるのかと客観的に自分たちを見てプレゼンテーションするなど、判断して評価していく仕組みが必要です。ですから、個人のレベルからは離れますけれども、アーツカウンシルみたいな役割です。イギリスだとブリティッシュ・カウンシルみたいなものがあるって、文化芸術やアート系の学校を割と意識的に束ねて、海外からの受け入れももちろんやっていますけれども、そういうことが総合的にできる機関なり場所なりが必要だと思います。

先ほどもったいないと言っていましたけれども、色々なことがやられているので、それらを網羅的に全てコントロールして紹介していくということではなく、情報を持って発信するということですね。すごく難しいことを言うのですが、そこに向かってアートセンターをつくっていかねばいけないような気はしています。

アートが好きな人のためのアートの情報を届けたり、色々な層があっていいと思うのです。食とつなげたり、観光とつなげたり、こんなコースを行ったらおいしいご飯が食べられて、ついでにアートを見られたら楽しいねでもいいと思うのです。ですから、かなり大変だと思いますが、色々なレベルをつくっていかねばいけないと思います。

○北村委員長 先ほど、南副委員長からネットワークを動かす本体がコンシェルジュになるのが理想的だというお答えをいただきました。

アートにかかわっている人たちはそんなに多くないと思いますけれども、少なからずコミュニティーがあるけれども、いついつにこれをしてよ、いついつにギャラリートークをしてよ、こういうプロジェクトをやるのだけれども、それに乗ってくれないかと言っても、そういう組織に属している人はなかなか動かないのです。ですから、その自由さが今はなかなかないのが実情です。逆に言うと、そういうことを担う人たちがコンシェルジュとして必要なかと思えますけれども、動かない人たちを動かすわけですから、なかなか大変ですね。

○南副委員長 一つは、コンシェルジュネットワークです。それぞれの組織の中の誰か一人がその組織の中のコンシェルジュネットワークの窓口の役割を担うのです。それは、プロフェッショナルな能力はなくてもよくて、色々なセクションがあるわけです。例えば、市役所では、交通課もあれば、文化部もあり、区政課などがあるわけです。そういったようなところにそれぞれいて、どこかからインプットとしたときにそこにつないでほしいと。そうしたら、コンシェルジュの役割の人はそれを承って、部署内で手伝ってくれるように

要請する義務を持つ役割です。そういったものをそれぞれの部分に横つなぎでつくっていくのです。

それが行政の中だけで済むかということそうではなく、外の会社、例えばテレビ局や新聞社みたいなところで、そこからコンシェルジュのネットワークで来たら優先しなくてはいけないという役割を持つことによって、極端に言うと、町内会のどこのおじさんにもつながってくるのです。それは、先ほど言ったような認定というアイデアですごくいいと思うのです。

認定をされれば、そういったネットワークの中の一員として、こういうふうな話があればつなげられます。そのネットワークの中でぽんぽんと話がすぐに伝わっていき、それぞれの条件のやりとりができるようにしていく窓口的な役割です。これについてわからないから教えてほしいといったシステムが必要ではないかと思うのです。

札幌市は190万人都市で、ものすごくたくさんの方が住んでいますので、190万人の人の顔を全部見ることはとてもできないわけですが、見えない部分をトンネルでうまくつなげられるような工夫が必要ではないかという意味です。

○北村委員長 ありがとうございます。

皆様のご意見をまとめるのはなかなか難しいですね。

○石川委員 僕は、コンシェルジュというアイデアに関してはすごくすっきりしていて、すばらしいですので、これでどんどん進めてほしいという気持ちです。

ただ、皆さんの中ではもやもやしているところがあるのですね。私は、自分の中ではコンシェルジュはすごく完璧なイメージがあって、こんなすばらしいアイデアはぜひ進めてほしいのです。

今、南副委員長がおっしゃったようなネットワークは、当然、コンシェルジュのある機能だと思います。僕がコンシェルジュに考える機能はメディアです。コンシェルジュというのはメディアであるべきであって、単なる相談窓口ではなくて、メディアですから、色々な情報を集めてきます。それがプラス営業になるわけです。また、富田委員がおっしゃったように、自分の組織や団体の中だけにいて、外へなかなか出てこない人です。そういった団体にいる人たちは、自分のこと自分で外部にPRすることがすごく苦手だと思うのです。そういうものはコンシェルジュへという流れで、僕の考えるメディアグループがどんどん入って行って、副委員長がおっしゃったように、そういう人たちが外にもっと出られるようなネットワークをつくって、どんどん外に出てもらおうのです。

だから、私の考えるコンシェルジュは、メディア体です。それは、芸森、教育文化会館などの施設に縛られるわけではなくて、色々なところに入っていけるのです。当然、町内会にも入っていけるし、水道局でも清掃局でも、どんなところでもアートというテーマで入ってこられるメディアです。また、皆さんからの相談も受けるのです。

営業という話も出ていますが、相談をもらうために営業はしないといけないと思うのです。それは色々ネット等を使ってPRするということです。ただ、色々な相談者が

いることによって見えてくることもすごくあると思うのです。先ほどお話があったように、市民がやる公演みたいなものをPRしたい、どうすればいいかといった相談もきっとたくさん来ると思うのです。そうしたときに、市としてどういった対応をすべきかを検討できる組織であるべきだと思います。ですから、私の考えるコンシェルジュは、副委員長がおっしゃったようなネットワークでもあるし、縦横無尽に色々なところに行けるメディアでもあると思っています。

メディアと言えば、雑誌がよく思い浮かびますが、雑誌はただ情報を受けて流すだけではなくて、独自に企画するのもメディアの能力だと思っています。色々な情報が流れて、色々なネットワークを構築する中で、コンシェルジュ自体が何かを企画して、ボランティアやアーティストや市民の情報をもとにアートの企画を考えて実行するのです。ですから、私の中では、コンシェルジュは、メディアであり、ネットワークであり、みずから簡単な企画を立案できる組織だと思っています。

また、コンシェルジュの組織のあり方としては、市の直営でやっていただくのが一番いいと思っています。そして、責任の所在に関しての私の意見としては、市長に腹をくっつけていただかなければいけないと思います。芸術祭も全国の芸術祭を見る中で、札幌は比較的后発だと思います。まだ1回目ですけれども、ほかの歴史ある芸術祭に比べて、突出して何かがあるかと言うと、そうでもない気もするのです。これから、芸術のまち、創造都市として抜きん出た存在になるには、そういった壁を越えることも大事かと思っています。

○北村委員長 メディアとして、ネットワークとしてのコンシェルジュですね。

ただ、500m美術館なんかで色々企画していますが、交通局の最終の許可をもらわないと展示ができないのです。交通局も大分なれてきているので、ある意味では話し相手というか、相談相手は交通局の誰々さんというところまでになりましたけれども、その人は代わってしまうかもしれません。

しかし、間口を少しずつ広げており、音を出してはいけないのも、監視人をつけていれば音を出してもいいとか、壁から5センチもはみ出してはいけないといっても、木の枝がちょっと出ている限りはいいとか、レギュレーションを少しずつ緩くしている状況です。

でも、ネットワークをつくって、どこにでも入って、市長からのお墨つきのアートセンターがいるのが見えないのか、俺たちのいいようにやらせてくれと言っても、組織としてはなかなか動けないと思っています。

人を巻き込んで参加型にするのに積極的に仕掛けをつくる仕組みをと尹委員もおっしゃっていましたが、雑誌の編集だったら特集記事をつくるみたいな形でコンシェルジュが独自に動く企画を立てていく機能はどうしても必要かと思えますし、そうあるべきかと思えます。

組織論については、私はちょっと違うことを思っていますけれども、清水委員や鈴木委員から何かご意見はありませんか。

○鈴木委員 私は、知識がこんなにあふれている場にいること自体がすごく幸せなことで

す。今、頭の中が吸収しようとして頑張っている感じで、スポンジの水があふれそうなくらい、大変な感じになっております。

市民参加型であったり、コンシェルジュがメディアの形になったり、そういった意味では、皆さんは同じく賛成の意見で、そのまま進んでいっていいのではないかという意見で、そういうことを軸に資料をつくっていけばいいのではないかと思います。私の中で、会議は少しずつ進んでいっているのだなということはわかるのですが、雲の上というか……。

変な表現ばかりで、済みません。

○北村委員長 僕は産んだことがないですけれども、産みの苦しみだそうですね。

○鈴木委員 これからどういうふうに進んでいくのかが私には想像が全くつかず、どうなるのでしょうか。

市民の参加型を色々な方が強く言っているから、そのお2人の話をもっと聞きたいなと思いました。要は、芸術をメインにやっていない生活をしている方たちが身の回りにたくさんいて、そういう人たちとお話をする機会がたくさんありそうだなと思ったので、こういう話を聞いて、自分たちの周りはどういうふうに芸術のことについて考えているかという私たち以外の人たちの話を聞きたいです。

○伊委員 鈴木委員が言っていることはすごくわかるのです。この先、この会議はどうやって続けるのだろうというぐらいです。

そこで、却下覚悟で言うのですが、今、アートコンシェルジュの話が色々出ていて、石川委員はビジョンがもうはっきりされているということですが、何となく、皆さんはもやっとしているのではないかと思うのです。そこで、札幌市認定アートコンシェルジュと勝手につくってしまうのです。先ほど南副委員長がプロフェッショナルな必要はないとおっしゃったことにすごくほっとしたのですが、例えば、私たちが勝手に市の認定アートコンシェルジュになってしまって、この先はどうするかを話し合ったほうが発展性はあるような気がするのです。すごくいい意見がここでいっぱい出ているのに、まとまり切らずばっというて、次にバトンタッチするのはすごくもったいない気がするのです。

本当に実際に動く方法を考えていく上で、アートコンシェルジュというキーワードが出ていて、中身も何となく皆さん共有されているところもあるので、市で認定して、勝手にアートコンシェルジュとうたって動いてみたらどうかという気持ちがあります。また、先ほど鈴木委員がおっしゃったように、私も本当に素人で、生活の中でどうやっていきますかということで質問がありました。

本当に小さい範囲でやっていることですが、私は公演をします。今回もそうですが、第1部では札幌に住んでいる人たちの歌と踊りをして、第2部では本州、全国でセミプロとして活動している吹奏楽団の有志の皆さんに声をかけたら、みんな北海道に来たいがために45人も来てくれることになりました。そして、北海道で活動している9人を足した54人の吹奏楽団の演奏会となります。

第1部の公演については、札幌には人材がどうしても少なく、ほぼ素人が歌を歌ったりします。例えば、私の主人は昔にバイオリンをちょっとやっていたから、この歌の伴奏にバイオリンを入れたりします。本当に素人ですけれども、少しでもかじっていたり、ちょっと好きだという人を引っ張り込んで舞台に出すのです。その人たちも最初は嫌々で、ぶーぶー文句を言いながらも楽しくやって、衣装は何を着ようと言ったり、素人ですけれども、玄人のように振る舞うのです。そうやって巻き込みながら感染していくのです。

これには労力と時間と根性と気合と気力の戦いで、私は何をやっているのだろうと思いつながりながら人を取り込んでいくのです。私なんかは全然歌えないからという人を取り込んでいき、やらせてみると、楽しくて、また何かやりたいという気持ちにつながっていくのです。

ですから、すごく小さい範囲ではあるのですけれども、そういった小さいものが市の中でいっぱい発生していくと。芸術的というか、創造都市というか、そういった部分につながっていくと思うので、本当に地道に自分の好きなことに巻き込んでやろうと言って、企画して、自分が苦しむというパターンです。

○清水委員 私は、最初に破壊的なことを言ってしまったので、建設的な話を一つぐらいしてから帰らないとなと責任を感じています。

やはり、コンシェルジュなど、今まで出てきたアイデアを盛り込みたいと思います。山田委員のお話を聞いているときから考えていたのですが、札幌の目指す創造都市がどんなものなのかを明文化して、それに絡めて、実質化のためにはアートコンシェルジュがあったら有効なのではないか、市民参加をもっと促してはどうかというような方向に持っていたらどうかと思います。

創造都市、クリエイティブシティという理念は、本を読んでいないので、レビューを読んだり、読んだ人の話を聞いただけです。本当にさらっとした知識ですけれども、もともとはアーティストだけではなく、お医者さんや弁護士など、要するにお金を生み出すような職業の人が集まるような魅力的なまちにして、これからの人口減社会でも人数をふやしたりして勝っていこうという理論だったと思うのです。しかし、今ここで話している創造都市はアートに特化しているから、お医者さんや弁護士を呼ぶという話ではないし、創造都市を目指して何が得なのかと思う人はいると思うのです。

そして、もともとの創造都市の中に出てくる寛容性がちょうどここでも出ましたね。あの理論では、例えばゲイの人とか、違うレベルの都市では排除されたりするような人たちが認められるということで、そういう人もクリエイティブクラスということで、創造都市の必要な人材だと言われているので、寛容性が札幌の創造都市にも重要だと思うのです。

今回出てきた話では、芸術特区みたいな感じで、ちょっとした規制緩和を目指すということも盛り込んでいったらいいだろうと思います。ですから、創造都市では、面白さ第一主義がキーワードになると思うのです。住んでいて毎日が楽しいまちだということをまず言って、札幌は創造都市宣言をしましたので、今度は実質化していく段階にありますが、そのためにどんなことをしたらいいのかを私たちが考えるというふうに議論を進めたい

いと思います。そこで、アートコンシェルジュという概念を私たちは考え、それがどのように有効なのか、創造都市はこういうもので、こういった都市の実質化のためには必要だという感じで盛り込んでいったらいいかと思いました。

○北村委員長　まとめていただき、すごくありがたいです。

○富田委員　多分、石川委員からつながる話になってくるのですが、メディアという言葉が出てくるときに、メディアという片仮名になった瞬間にとわかりづらくなるところがすごくあるのです。

また、創造都市の中には、一人一人が創造性を発揮すると明文化されているのですが、コンシェルジュという言葉も、言い方がすごく悪いのですけれども、ちょっと気取った雰囲気があって、どちらかという、まちの何でも屋台ぐらいのほうが親しみやすく取っつきやすいと僕は思っているのです。

だから、SNSなど、自分が気になったものやおもしろいと思っているものを日常的にメディアになって発信している人はたくさんいるわけですから、そういうものをどういうふうに拾っていくか、また、それが創造することにつながるのだということをどういうふうにわかってもらうかは、これからすごく大事なことになるのではないかと思います。

ですから、その楽しさや面白さがわかったり、文化芸術創造都市といきなり広げてしまうと何だかわからないものになるのですが、自分の手応えになるところから一つずつそちらに集めていくのはすごく大事なような気がしています。

清水委員がおっしゃったように、その中で、特区などの許されている場所とか、コンシェルジュというものかどうかはわかりませんが、そういうふうに認定されていくことなど、ちょっとした仕組みやきっかけをつくるのがこれから必要ではないかと思います。

○北村委員長　ありがとうございました。

そろそろいい時間ですが、大きな議論の流れからすると、清水委員がきれいにまとめてくださいましたし、最初に私の話を南副委員長がまとめてくださいましたが、理念的なものとしては、創造都市さっぽろがあり、それは一体何なのかということです。そして、アートや文化芸術とのかかわりはどういうものなのかを一度ここで確認するということです。

石川委員は前にブランディングみたいなことをおっしゃっていましたが、札幌のアートの面白さのキャッチフレーズをつくるでもマスコットをつくるでも何でもいいのですけれども、札幌におけるアートの楽しさを営業するような形で広く知っていただくための方策を考えるということです。それが面白さ第一主義なのかどうかはわかりませんが、そんな考えです。

それから、組織として、アートセンターみたいなものがハード的には、あるいは、ソフト的にはできるかもしれないですね。その中で、コンシェルジュ的な機能を持ったネットワークの組織、あるいは、実際にネットワークを稼働させる人ですね。どういう仕事があるかということ、市民の参加を促して、アートの楽しさを少しずつでもわかってもらえるよ

うな仕組みみたいなものを考えるということです。

ここで言う議論の最初にアートの問題を考えたときには、今日は責任という話も出てきましたけれども、いつも出てくるのは富田委員がおっしゃっているクオリティーの問題で、アマとプロの違いみたいなものがあると思います。しかし、今回の私たちの円卓会議で、例えば、創造都市さっぽろについて、南副委員長のご意見では、実際にアーティストがここで生活できるようなまちにならないと実質化とは言えないということです。それは、前の2回目の円卓会議からの宿題でもあって、実際にどうやってアートを専門職として暮らしていけるのかが課題だと思うのです。

ただ一方で、私たちの生活の中にアートがあって、創造性がとても大事だということを一人でも多くの人にわかってもらう、浸透させるときには、尹委員がおっしゃっているように、バランスはとても難しいとは思いますが、プロ、アマ関係のないような地道な活動を広く紹介していくような、拾っていくようなことが必要になってきます。

私としては、どちらかという、尹委員側です。つまり、プロ、アマ余り隔てなく、私たちの日常的な活動を広げて、少しでもクオリティーを上げていくような手助けをコンシェルジュやアートセンターでできればいいのかなと思います。逆に、そういうプロフェッショナルな人にはそういう仕事をこれから担ってもらい、あるいは、今回、札幌に要請を出しているアートプロジェクトマネジャーたちなどにも3年後に向かって仕事を続けていってもらいたいと希望します。ただ、それはご本人たちのご意思で、どうなるかはわかりません。でも、アーティストやプロジェクトマネジャーなどに札幌で仕事があって、アートの仕事ができる環境をつくっていくことが大事だと思います。

今までの議論の中で、そんなふうに私は感じているのですけれども、どうでしょうか。これを文章として少しずつまとめていかなければいけないのです。

実は、カンニングペーパーがあります。

それでは、そろそろ時間となりました。本日の話を踏まえて、次回までに可能な範囲で事務局にメッセージの骨格を作成してもらい、もしくは、〇〇委員に骨格を形成していただき等々となっています。

もちろん、事務局の方にやっていただいてもいいですし、僕は私の責任かなとも思います。責任問題を問われれば、そういう覚悟がないわけではありませんけれども、事務局と相談させていただきたいと思います。

○南副委員長 要するに、まとめると言っても、今までのお話の中でベースになる下敷きになるものをつくってみたいという委員がいらっしゃるのであれば、頼まれてこの委員をやっている方よりも応募してきてくださっている委員の方にそういうことをできればお願いしたいと思います。これはどうかというものを委員長や事務局にメールして相談して全然構わないと思うので、それでまとめてくださる方がいたら、円卓会議としてはよりいいのではないかと考えています。

これは、行政がメインに主導してやっているわけでもないし、僕たちや大学の先生だっ

たり、アーティストがメインにやっているのではなくて、基本は札幌市民から応募してきた人たちで、こういうのはどうだ、ああいうのはどうだと言って提言をつくっていくことが基本です。その中でこういうふうに話し合っているのも、もし我こそはという方がいらっしやるとすばらしいと思うのですが、いかがでしょうか。

○石川委員 素案の素案でいいならやってみたい気がします。

○北村委員長 ただ、時間的な制約もあります。

まずは箇条書きを送っていただき、それに肉付けしたり、あるいは、順番を変えたり、議論の方向性を多少修正するなりしてまとめていきます。今まで、石川委員にこれまでの5回の会議の流れをもう一回振り返っていただいて、箇条書きや骨子で構わないので、お願いしたいと思います。次回は11月上旬ですから、それよりも前に送っていただき、私がもう一回見て、文章を起こしていきたいと思います。1週間か2週間ぐらいで、忘れないうちに送っていただけたらと思います。そして、送っていただいたものを皆さんに回覧して、次回はそれぞれの箇条書きの部分に肉づけをしていくような手順にしましょう。

それでは、今言ったように、作文するための時間を多分とっていると思うのですが、11月上旬か中旬に開催予定です。皆さんには日程調整表をお出しいただきたいと思いますので、よろしくお願いします。

それでは、事務局に戻します。

3. その他

○事務局（高橋調整担当係長） それでは、今の流れを簡単に最後に確認します。

まず、委員長、副委員長のアドバイスもいただきながらという話もあったので、よろしければメールアドレスを石川委員にお教えしてもいいですか。そして、石川委員にメールアドレスをお教えして、この議事録もでき次第、すぐに石川委員に送らせていただきます。

1回から4回までの議事録はホームページにもうアップしてありますので、そちらも参考にいただきながら、2週間前後をめぐり一旦の骨格をつくっていただきたいと思います。その骨格を私にご提出いただけましたら、すぐに準備を整えて、各委員の皆様へ送らせていただきます。

そこからのイメージですが、もらったものを各委員が考えながら6回目でお話しするのか、もしくは、一旦、各委員にお渡しして、各委員からもう一度戻してもらったものをまとめて6回目に出すのか、どちらがよろしいでしょうか。

○北村委員長 後者のほうがいいと思います。

○事務局（高橋調整担当係長） わかりました。

日程的にちょっとタイトになってくると思うのですが、まずは2週間ぐらいで石川委員にまとめていただいて、そちらを私ができるだけ早く皆様にお送りさせていただきます。私のお送りした日によると思うのですが、多分、1週間など、余り長くない期間で皆様に筆を入れていただくというか、自分はこう思うという形にさせていただいて、それを私に送

り返していただいたものを最終的に委員会の前に皆さんにお送りして委員会に臨むという形にしていきたいと思えます。

事務局からは以上です。

○北村委員長 大変な作業をこの2カ月ほどでしていただかなければいけませんけれども、どうぞよろしくお願ひいたします。

ほかに何かありますか。

(「なし」と発言する者あり)

4. 閉 会

○北村委員長 では、きょうは時間がちょっと過ぎましたけれども、5回目の円卓会議を終わります。

どうもありがとうございました。

お疲れさまでした。

以 上